

かくも長き手紙

マリアマ・バー × 中島弘二訳



かくも長き手紙

昭和五十六年一月二十日 第一刷発行

定価 一〇〇円

著者 マリアマ・バー

訳者 中島弘二

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二 郵便番号 一〇二

電話東京〇三九四五―一―二(大代表) 振替東京八一三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

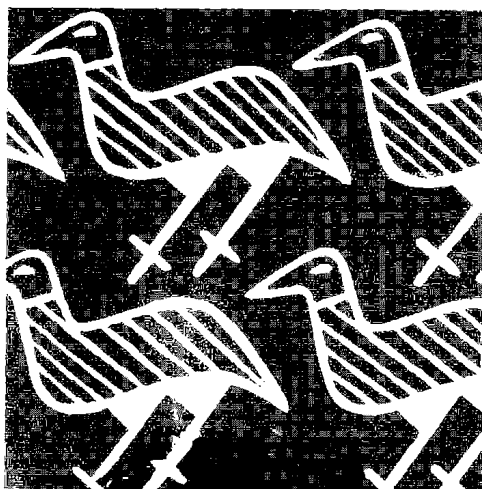


著丁・風丁本はおとりかえします。

© Hiroji NAKAJIMA 1981, Printed in Japan.

かくも長き手紙

マリアマ・バー 中島弘二訳



Title : UNE SI LONGUE LETTRE

author : Mariama BA

Copyright ©1980 by Mariama BA

Japanese translation rights arranged with

Les Nouvelles Editions Africaines

through Japan UNI Agency, Inc.

日本の読者へのメッセージ

時代が進むにつれ、世の中も自由になりましたが、それでも近代化の波は、男と女が生活を共にする形式としての夫婦関係にまでは、及んでおりません。

女は影のように夫に寄り添って生きなければならない、という今までのやり方では、女ばかりが犠牲になってしまふのですから、それを覆えそうとする動きが出てきても、当然ではないでしょうか。

アフリカでは、他の国々と同じかそれ以上に、幾世代にもわたって培われてきた風俗習慣が根強く残っていて、男は特権的な存在であり、女は男にかしずくものとされていきます。

この小説ではひとりの女性が語るのです。いわれなきタブーや束縛に抗議しているのです。思いきった物の言い方をするのも、虐げられた人々を弁護するため、べつに怒りをぶちまけるつもりはありません。

セネガル男性の自覚を、さらにはすべての男性の自覚をうながすには、まずなによりも女

性の価値を認めさせる必要があります。わたしはなにも女性解放運動家になろうというのではなく、ただそうすることが生きていくうえで欠かせない義務のひとつだと思うのです。

マリアマ・バー

目次

日本の読者へのメッセージ	3
かくも長き手紙	9
解説	190
訳者あとがき	197

装幀 大沢泰夫

かくも長き手紙

わたしと喜怒哀楽をわかちあった、貞潔で
心正しいアビアトゥ・ニアンへ。

頭が良く気だてもやさしい人、アネット・
エルヌヴァイルへ。

すべての善意ある男性と女性へ。

1

アイサトウ、

お手紙受けとりました。返事のかわりに、わたしはこのノートを開くことにします。苦しいときには、これが心の支え。だれかに打明ければ、すこしは氣も晴れるくらいことは、年をとれば自ずとわかってくるものです。

あなたとわたしの間柄は、きのうきょうに始ったものではありません。おばあさん同士がもう大の仲良しで、家と家との柵をこえて、毎日のように行き来がありました。母親たちにしたって、相手の家のおじさん、おばさんを自分のほうで世話するんだと、おたがいに言い張っていたものでした。わたしたちはコーランを習いに行くのもいっしょ。石だらけの凸凹道を毎日歩いて通い、腰布もサンダルもすぐだめにしてしまった。親知らずが抜けると、ふたりで穴を掘って埋めたこともあった。覚えてますか？ いい歯が生えますようにって、大

地の精にお祈りした、あのときのことを。

年をとり、いろいろ経験をつむと、若いころの夢も霧のように色あせてしまう。わたしの胸には思い出だけが焼きついて、追憶の海が広がっているのです。

思いだすわ、あなたのことを。過ぎ去った日々があざやかに甦り、胸に熱いものがこみあげてきます。わたしは両の目をそっと閉じる。寄せては返す、さまざまな感覚の波。まぶしくて目が熱い。かまどの炭火だ。食いしんぼうの口にしみわたるおいしさ。緑したたるマンガー。ふたりでかわるがわる頬ばったんだわ。わたしは両の目をそっと閉じる。寄せては返す、さまざまなイメージの波。汗まみれの黄ばんだ顔は、あなたのお母さんよ。台所から出てきたところだわ。ぬれた髪の子供たちが、きゅきゅしゃしゃい通りすぎる。泉で水浴びをした帰りなのです。

わたしたちが歩んできた道はひとつ。恋の芽生える季節から、一人前の女として成熟するまで、いつもあなたといっしょでした。

アイサトゥ、アイサトゥ、アイサトゥ。たいせつな人のことは、三回つづけて呼ぶのが、昔からの習わしです。あなたが離婚したのはつい昨日のこと。そして今はわたしが未亡人になりました。

モドゥは死んでしまった。どう言えばわかってもらえるかしら。なにも運命と約束があっ

たわけじゃありません。運命は好きなときに好きな人を召しあげてしまう。ただそれだけのこと。そりゃ、こちらの思いどおりにしてくれることもある。でもたいていは、不幸やつまずきは運命のいたずらなのです。そんなときはだまって耐えるだけ。わたしも耐えたのです。あの電話がかかってきたときの、崖からつき落されたようなショックにも、耐えてみせたのです。

手をあげて、タクシー！　タクシー！　早くして！　もっと早くしたら！　胸に重苦しいものが降りてきて、息がつまりそうだわ。早く！　もっとスピードを出してください！　やっと病院だ！　病人の膿とエーテルの、むせかえるような臭い。病院よ！　ひきつった顔また顔。わたしの知っている人、知らない人。病院までついてきてくれた人は、みな泣いていた。恐るべき悲劇の場に、思いもかけずに居合わせてしまったこの人たち。まっすぐにのび広がる廊下。いったいどこまで行けばいいの？　あった！　部屋はいちばん奥にあった。部屋には一台のベッド。モドゥはこのベッドに息絶えていました。生者の世界からへだてるように、全身をおおっている白い布。ふるえる腕がのびて、この布をすこしずつめくって行く。細い縦縞のはいった青いワイシャツ。胸はだらしなくはだけ、こい胸毛がのぞいていても、もうびくりともしない。不意をつかれ、苦痛にゆがんだこの顔は、まさしくあの人だ。あの人にまちがいない。禿げあがった額も、痴^しれたようにだらしなくあいた口も。わたしは

思わず手をにぎろうとした。けれどまわりの人が止めにはいって、ベッドから遠ざけられてしまった。茫然としてたたずむわたしの耳に、医者のマウドの声が響きました。

「急性の心臓発作だね。事務所で手紙を口述しているさいちゅうに倒れたんだ。秘書の女の人が、それでも気をしっかりもって、ばくを呼びだしてくれてね。でも救急車を手配して、病院にかつぎこんだときは、手遅れだった。こと切れてしまっていたんだよ」

「手遅れだった」と、マウドはさっきからそればかり。

わたしには返す言葉もありません。すべては後の祭りだったのです。

「心臓のところをこうやって、マッサージもしたし、口から息を吹きこんだりしたんだがね」と、マウドは身振り手振りで説明してくれる。心臓マッサージに、口うつしの人工呼吸……そんなもので神の意志にさからおうなんて、どだい無理な話に決まってるわ。

まわりの話し声がだんだん遠ざかる。自分は今までとはちがう世界に入りこんだ気がしてくる。これからはたったひとりで、茨の道を歩むのだと思うと、さすがにこたえます。死とは、か細い小道です。喧噪の絶えないこの世と、すべてが永遠の静寂につつまれるあの世という、ふたつの世界をкаろうじて結ぶ吊り橋なんです。

どこか横になれるところはないのかしら。この年だもの、まさかところかまわず、というわけにも行きません。数珠をしっかりと握って、気をとり直さなくては。わたしは足がふらつ

いて、思わずよろけそうになりながら、懸命に数珠をつまぐっている。腰のあたりが大きく波打って、まるで出産のときのようにです。

過ぎし日の切れ切れな思い出が、もうろうとした意識のうす暗がりを駆けぬけていく。勇壮に響きわたるコーランの経句。丁重なお悔みの言葉。わたしの心は千々に乱れてしまう。「よろこばしき生誕の秘蹟に、暗い死の秘蹟。そのあいまにぼくらの人生があり、人それぞれ運命があるんだよ」と、マウド・バーは言ってくれる。

わたしはマウドをじっと見た。白衣を着たこの人は、いつもより大きく見える。ほんとうは痩せたんだと思う。このまっ赤に充血した目が、四〇年にも及ぶ夫との友情の証しでなくてなんでしょう。ひきしまった腕の美しさには、まったく惚れぼれしてしまう。繊細で、しなやかで、おどろくほど巧みに病をつきとめてしまう腕。この両の腕が友情にうごかされ、現代医学の粋をつくしても、ついに親友の命を救うことは、できなかったのです。

モドゥ・ファルは、ほんとうに死んでしまったのよ、アイサトゥ。それが証拠に、早くも「知らせを受けた」人たちが、おびただしい数の男女が家におしかけ、泣きわめいているではありませんか。ただでさえ辛いわたしも、こんな張りつめた空気には、身を切られる思いです。こんなことが翌日の埋葬までつづくかと思うと、まったくやりきれない。

なんとという人波でしょう。地方からもぞくぞく上京してきて、家の中はごった返しています。モドゥの死は、ラジオのニュースでも流されたそうなんです。

近親にあたる女たちは、みなせわしげに動きまわっている。これから抹香やオーデコロンや木綿布を病院に持っていく、死装束をととのえなければなりません。純白の木綿布が七メートルばかり、ま新しいかごの中へきちんとたたんで納められた。イスラム教徒の死には、これが唯一の正装なのです。セムセムを忘れてはなりません。イスラムの聖地に汲

んだ奇蹟の水、どの家庭にもたいせつに保存されているはずの、この水を。腰布にはあのモ
ドゥにふさわしく、鈍色^{にびいろ}で豪華なものが選ばれました。

わたしは哀悼の意をあらわして、黒のターバンを頭に巻いた。背をクッションに押しあ
て、足をのばし、人々のせわしない動きを目で追っている。足もとには、香典受けにと買い求
められたかごが置いてある。となりの第二夫人がどうも気になって、いらいらしてしまふ。
お葬式なのだから、この人がわたしの家に居すわっても、当然のしきたりなんだけれど。彼
女の頬は見るからにこげ、目もだんだんくぼんでいく。ばっちりしてきれいな目が、底知れ
ぬ憂いをおびてまたたいている。悔やんでいるのかしら。なんのくったくもなく笑いはしや
ぎ、恋というものに淡い期待をよせる年ごろなのに、この子はすっかり悲しみに打ちのめさ
れているのです。

モドゥの埋葬に立会うために、男の人はそろって墓地へむかう。官庁の公用車を先頭に、
乗用車、バス、トラック、オートバイがえんえんと列をなす。(これほどの葬列は、後々ま
での語り草になることでしょう) 小姑たちは、わたしたちの髪を結い直してくれる。わたし
と第二夫人は、腰布を広げ合せて臨時にもうけたテントの中に、すわられました。その
場に居合わせた女たちはみな立ちあがり、悪運除けのおまじないに、風にはためくテントめ
がけて小銭を投げてくれます。